

中原中也について

内山 さゆり

目次

はじめに

第一章 中原中也生い立ち

第二章 孤独の境遇

第一節 故郷

第二節 交友

第三章 魂の労働

第一節 中也と「死」

第二節 中也と「詩」

第四章 在りし日——孤独の詩人

おわりに

はじめに

私の中也詩との最初の出会いは中学二年の時だった。国語の教科書に載っていた「月夜の濱邊」がそれである。

「月夜の晩に、ボタンが一つ／波打際に、落ちてゐた。」で始まるこの詩の、寂しく美しい情景に一目でひかれた。そして授業で、先生の「この詩はこの人の子供が亡くなった時に書かれたものです」という言葉に、何故か衝撃を受けたのを覚えている。子供や悲しみ

を直接表す単語を全く用いていないこの詩に感じる、言い知れぬ寂しさが、私を強く感動させた。

以来、この詩と詩人中原中也は、私の中で気になる存在となった。

高校時代の授業でも中也詩は取り上げられており、その時は「息子の名は文也で二歳で亡くなり、翌年中也も亡くなった」と聞いた。そして一層気になる存在となる。

その後短大に入ってから、私は中也の詩集を読んだ。彼の詩はどれも哀調を帯びていた。「月夜の濱邊」のみでなくすべてに寂しさが感じられるのである。それは何故だろう。息子の死以外にも悲しみがあつたのだろうか。そして、何故それを「詩」という形式で表したのだろうか。そういう疑問から、単に気になるだけでなく、詩人中原中也を知りたいと思うようになった。

こういふいきさつで、卒業論文に中原中也を取り上げる事にした。

この論文では、彼の生涯の寂しさであったと思われる故郷への思いと様々な孤独感から、中原中也にとって詩とは何であったのかを考えていこうと思う。

第一章 中原中也生い立ち

中原中也は、明治四十年（一九〇七）四月二十九日、山口県吉敷郡山口町大字下野令村（現山口市湯田温泉）に、父謙助・母フクの長男として生まれた。中也の後、亜郎・恰三・思郎・呉郎・拾郎と男の子ばかり生まれるのだが、中也は両親の結婚七年目の嫡子誕生ということで中原家の喜びは大きかった。軍医だった謙助は当時旅順に駐屯中で、同年十一月、中也はフクとその母スエに連れられて旅順に赴き、父親と初対面している。

母フクは横浜に生まれ、後、湯田で医院を開業していた叔父中原政態の養女となった。父謙助はその中原家に養子に入った人であるが、当初養子になる事を拒み、十五年後最終的に中原姓を称するまで野村姓・柏村姓を称している（但し生まれは小林姓）。中也は八歳まで柏村姓である。

明治四十一年八月山口に帰る。後、父の転任によって二歳から六歳までの間に広島・金沢と移り、大正三年七歳の時再び山口に戻る。

地元の下野令小学校に入学した中也は成績優秀で、神童と呼ばれた。両親の嫉は厳しく、温泉町である湯田の環境が悪いといって中也を遊びに出さず、又溺死を怖れて水泳を禁じた。

中也八歳の時、三歳下の弟亜郎が病死、初めての詩作をする。

△大正四年の初め頃だったか終頃であったか兎も角寒い朝、その年の正月に亡くなった弟を歌ったのが抑々の最初である▽

〔詩的履歴書〕より。（以下同じ）

大正七年、山口師範付属小学校に転校し、教生後藤信一に文学の影響を受ける。

△詩の好きな教生に遇う。恩師なり▽
大正九年二月、「婦人画報」「防長新聞」に短歌を投稿入選し、以後大正十二年まで八十余首が入選掲載される。又中学時代には、友人と歌集『末黒野』を刊行し、「温泉集」と題した二十八首を収めている。

△友人と『末黒野』なる歌集を印刷す。少しは売れた▽

十二番の好成績で入学した県立山口中学時代の中也は常に、何になろうかと考えていた。小説家になりたいと母親に言ったこともあった。次第に文学への興味が深まる。かつては神童と呼ばれた彼だが、読書に耽って学業を怠るようになり、結局中学三年で落第、京都の立命館中学に転校する。

△大正十二年春、文学に耽りて落第す。京都立命館中学に転校す。生れて始めて両親を離れ、飛び立つ思ひなり▽

京都では大正十二年四月から大正十四年二月までを暮らす。

離郷した秋、高橋新吾『ダダイスト新吉の詩』を読んだ中也は自らを「ダダイスト」と称し、ダダイズムの影響の下に詩作し、友人たちと論じた。

△その秋の暮、寒い夜に丸太町橋際の古本屋で「ダダイスト新吉の詩」を読む。中の新篇に感激▽

その京都時代、詩人永井叔を通じて、当時表現座の女優であった長谷川泰子と知り合い、同棲を始めている。また富永太郎と知り合う。後、富永の紹介によって、「口惜しき人」となる小林秀雄と知り合う事になる。

△大正十三年夏富永太郎京都に来て、彼より佛國詩人等の存在を学ぶ▽

大正十四年三月、泰子と共に上京する。早稲田や日大を受験しようとするが手続上の事や当日の遅刻などで受験出来ない。帰省して上京を反対する両親を説得し、一年間東京に住んで予備校に通う許可を得る。両親は中也が文学をやることに反対だったが、彼はこの年「詩を専心しよう」と決めている。中也十八歳の時である。

△大正十四年八月頃、いよいよ詩を専心しようとして大体決まる▽
念願の上京を果たした中也は、その年小林秀雄と知り合うが、「奇怪な三角関係が出来上り」(「中原中也の思ひ出」小林)、泰子はい小林的許へ去る。

大正十五年四月、日本大学予科文科へ入学するが試験を一教科も受けず、九月退学した。この年、今日彼の初期詩篇を代表するものとして引用されている「朝の歌」を書く。

△大正十五年五月、「朝の歌」を書く。(中略)「朝の歌」にて

ほど方針立つ▽

昭和二年に河上徹太郎、諸井三郎らと知り合ったことから音楽グループ「スルヤ」に近付き、中也の詩「朝の歌」「臨終」に曲が付けられ歌われる。これらが歌詩として「スルヤ」第二輯に掲載され、中也詩が初めて活字となった。この年五月に父謙助が病没したが、母フクは中也の長髪を恥じて、彼を葬儀に帰らせなかった。

昭和四年、河上徹太郎・安原喜弘・大岡昇平らと同人雑誌「白痴群」を創刊。中也は多くの詩を発表するが、翌年第六号で廃刊となる。

△昭和四年同人雑誌「白痴群」を出す。昭和五年八號*が出た後廃

刊となる。以後雌伏▽(*六號の誤記)

生涯二冊のランボーの訳詩集を刊行する彼はフランス留学を望ん

でおり、昭和五年、中央大学予科へ編入学、翌年東京外国語学校専修科仏語部に入學する。しかし修了後も留學が実現されることはなく、友人に個人教授をする。

昭和六年九月、弟拾三(二十歳)が病没する。数篇の追悼詩と小説「亡弟」を書く。

昭和七年、詩集『山羊の歌』を編集。この年十二月、遠縁に当る上野孝子と結婚。翌年には長男文也が誕生、溺愛し、詩業を継がせたいと思う。『山羊の歌』は資金の不足などから、刊行されるのは二年後の昭和九年十二月である。この詩集刊行前後には数多くの詩作があり、「紀元」「四季」「文学界」その他に発表し、活躍がみられる。

△大正四年より現今迄の制作詩篇約七百。内五百破棄▽

文也のために「遺言的記事」を書き、詩生活を振り返った「詩的履歴書」を付した昭和十一年、二歳を迎えて間もない文也が病没した。その約一ヶ月後に次男愛雅が誕生するのだが、愛兒文也を失った中也の落胆は大きく、神経衰弱に陥ってしまう。翌十二年、千葉寺療養所に入院、退院後は東京を離れ、鎌倉に移る。そして、「亡き兒文也の靈に捧ぐ」詩集『在りし日の歌』の編集・清書を九月下旬に終え、その原稿を小林秀雄に託す。

帰郷を決意するが、十月五日発病、翌日鎌倉養生院に入院する。そして二十二日、結核性脳膜炎のため、永眠。三十歳の秋だった。

翌年一月には次男愛雅も病没。そして四月、中也の遺言であるかのような題名の詩集『在りし日の歌』が刊行された。

第二章 孤独の境遇

第一節 故郷

中也の離郷のきっかけは中学三年時の「落第」である。入学時、「東大は立派に入れる」とまで言われていた彼の落第は、両親によつては世間体の悪いものだった。その頃の状況を弟思郎はこう言う。「一家が一時騒然とし、まもなく沈うつになった記憶がある」

〔兄中原中也〕

かくして中也は京都へ赴く。

文学を志す彼にとって、家を離れる事は好都合だった。両親は文学をやる事に反対だったので、彼は離郷によつてその監視から逃られ、詩人への道が開かれていく。

しかし、「両親を離れ、飛び立つ思ひ」でありながら、厳格に、又干渉主義の許で育った彼の異郷での生活はかなり孤独なものであった。中也の落第に、「教育方針がまちがっておった」と、父親はそれまでの干渉主義を一変して放任主義に切り替え、彼と家とのつながりは母親からの仕送りだけであった（彼は一生仕送りを受けて生活する）。

家族は離郷後の彼の動静を手紙と帰郷時の話以外は知らず、又彼の方も生活の実態などを詳しく知らせてはいない。文学に進む事に口出しされなくなつたからでもあるだろう。だがそれよりも、「落第」という事実によつて半ば追い出されるような形で離郷した彼は、「詩人」として成功するまでは完全には故郷に受け入れられないという思いがあつたのではないか。

これが私の故里だ
さやかに風も吹いてゐる

心置なく泣かれよと
年増婦の低い声もする

あゝ おまへはなにををして来たのだと……吹き来る風が私に云ふ

〔帰郷〕

「詩人」として認められるまで故里は「何をして来たのだ」と彼を責め、同時に「心置なく泣かれよ」と慰める。

又それは彼の「何をして来たのだ」と自責する声でもあり、故里で「心置なく泣」きたいという願望でもあつたろう。

故郷とは、そこを離れて初めて意識されるものだと思う。中也は一生故郷を思い続けた詩人であつた。

晩年彼は故郷へ戻ることを決意する——これは果たされぬまま生涯を閉じてしまふのだが。

その帰郷を友人らに報告する手紙の中に、彼の故郷に対する思いがうかがわれる。

まず帰郷の理由を「来春よりは今山口に一人残つてゐる弟も他へ行きますので、あとには母独りとなりますから此の秋より小生等親子にて当地を引上げ帰山します」と書き、続けて「仕事のためには可なり不安ですが、関東よりは関西、関西よりは中国の方が好きである小生には、却て好都合です。出来るだけ旅行なぞしながら、山口に暮します」（後藤信一宛）という思いを書いている。

帰郷の決意は、長男文也の死によつて促されたものとも考えられ

る。

自分に合っていないと感じる都会での生活は、詩人としての「仕事のため」のものだった。だが文也の死後神経衰弱に陥つたくらいだから余程気弱になっており、詩集『山羊の歌』で詩人としての名声を一応は保持していたので、「心置なく泣くための帰郷だったのかも」かもしれない。

再び手紙からの引用だが、関東を「去る気持たるや単純にして複雑、複雑にして単純、即ち表現に適して叙述には適しません。……それに関東の自然はやつぱり僕にはつまらない。枯れた葎に押寄せた寒い宵かなんかみたいで、どうも肉感が足りなくて仕方がない」(河上徹太郎)と、都会での生活の疲れを見せる。そして故郷への思いをこう書く。「帰つてもまあ、あんまりいいこともないのですがほんのつまらぬ道の曲り角にも、少年時代がこびりついてゐますし、まあ、なんとなく粘着力は感じられます」(安原喜弘宛)。
ほんのつまらぬ道の曲り角にもこびりついている少年時代、それが彼の心に宿る故郷の姿であった。そして思い出の宿つた故郷への憧憬は、彼が一生抱き続けた孤独からだったのである。

第二節 交友

離郷した中也には、波紋のように広がる交友関係が待ち受けていた。

同棲した長谷川泰子とは詩人の永井叔を通じて知り合ったし、京大の生徒で、立命館中学の講師をしていた富倉徳次郎から富永太郎を紹介され、富永からは小林秀雄を、という風にひとつの出会いが他の出会いへとつながっていく。その中で影響し、影響されてい

た。中也の一生において人との出会いは非常に重きを占めていて、それなしでは詩人中原中也は存在し得なかつたのではないかとさえ思われる。存在しないとまでいかなくとも、詩人として認められるのがもつと遅れていたかもしれない。

菊岡久利は「中原中也には、それが悪友であれ良友であれ立派な友人が多い」(鎌倉の曇り日)と言っている。

では、その友人たちにとって中也はどんな存在であつたか。

「生前その奇行を以って身辺の者を一人残らず悩ました」(「中原中也—日本のアウトサイダー」)と河上徹太郎は言う。友人たちの語る中也の思い出には、必ずと言っていい程このような印象が出てくる。

彼の「奇行」と言われるひとつに訪問癖がある。彼は、新しい友人が出来る度にその近くへ越して行つたり、これと思つた友人の所には根をつめて通い、夜通し論じたりした。「白痴群」の同人だつた村井康男は「今夜もまた中原のお相手かと思うと、昼間の勤めが終つても下宿に帰るのがおっくうになつた」と回想している。

その他、「中原はとかく誰かに会えば、自分の考えを語らずにはおられぬ性格であつた。それも儀礼など一切ぬきの言葉で語り出すから、誤解されることが多かった。すると中原は相手が氣にくわなくなつて喧嘩をはじめた」(「中原中也の詩と生涯」村上護)。「中原はよく出て歩き人を訪問し議論し、酒を呑み宣言をし、喧嘩をし、一緒に居る人を困らせ自らも苦しんだ」(「北澤時代以後」関口隆克)などの記述から、中也の交友のあり方をみる事ができる。彼の訪問と議論好きは、周囲の者を悩ます行爲であつた。

それでは、何故中也にはこういう行つた奇行と言われるような行爲が

あつたのか。

中也が友人としてつき合った人たちには年上が多い。小林秀雄にしろ河上徹太郎にしろいずれも年上である。しかもほとんどが東京生まれ東京育ちで、小林のごとき一中・一高・東大とエリートコースを進む者もいる。地方出身の彼が、そういう中で対等なつき合いをしていくには、他人から認められる何かが必要だっただろう。その「何か」を求める彼の、周りの状況に対する、また自身の詩に対する「強がり」のようなものが、持ち前の性格も手伝って、身辺の者を悩ますような行爲となつて表れたのではないか。そして、大勢の中で孤立こそ孤独を感じるものである。そういった孤独感から出た「奇行」であつたととれるだろう。

彼のこういつた孤独を支えたのは「詩」に対するプライドであつた。

かつて中也は「ダダイスト」を自称した。「ダダイスト或ひはダダさんが、中原の綽名であつて、ダダの資格で彼は五歳年上の学生達から愛されもし、敬遠されもしたのである。ダダの名において、彼の主張は耳を傾けられた」と大岡昇平は語る。そして富永太郎の、友人宛書簡に「ダダイストを訪ねてやりこめられたり」の句が見られるように、彼は「年上の男をやり込めるのがうまかつた」(「朝の歌」大岡)らしい。

京都時代の中也を支えたのは「ダダ」である。

富永太郎から詩人たる多くの事を学んだ中也は、東京時代、「詩」への自信と「詩人」となるべき自覚が支えになつていただろう。しかし、そういったプライドによる議論は、却つて友人を遠ざけるものとなつた。孤独を支えるはずのプライドが、一層孤独を深める結

果となつていく。

大岡昇平はまた「白痴群」の頃のことを回想する。「当時中原は絢爛たる話し手であつて、その詩と共に、議論で我々を眩惑したのであるが、中原は崇拜者に対しても甚だ嫉妬深く、我々が彼の教へるところ以外を考へることを許さなかつたので、中原との交際がだんだん息苦しくなつて来たのである」(「朝の歌」)

こういつた文学上の友人だけでなく同棲していた長谷川泰子も彼から離れ、小林秀雄の許へ去つてゐる。後、小林は泰子から離れて行くのだが、彼女は中也の許へは帰らない。しかし中也は、二度と戻つて来ない泰子に対し、色々と面倒をみている。

泰子が去つた事実だけでも孤独は充分感じられるものであらうに、戻つて来ることのない彼女に後も盡くし続けるといふのには、もっと大きな孤独を感じていたのではないだろうか。中也が泰子を思い続けたのは、もちろん愛情という面もあつただろうが、彼が泰子に詩人の素質を認めていたことと、彼女が、中也も幼年期に暮らしたことがある広島出身であつたので、地方出身者に共通の孤独を分かち合える存在だつたと考えられると思う。彼はこう歌う。

私は身を棄ててお前に盡さうと思ふよ。

またさうすることのほかに、私にはもはや

希望も目的も見出せないのだから
さうすることは、私に幸福なんだ。

幸福なんだ、世の煩ひのすべてを忘れて、

いかなることとも知らないで、私は
おまへに盡せるんだから幸福だ！

〔無題〕Ⅲ〕

彼の境遇とこういつた詩に孤独を感じないではいられないのだが、彼にとつて、彼女に「身を棄てて」「盡さう」とすることは、「世の煩ひ」である様々の孤独を「忘れ」ることができ、むしろ「幸福」であつたのだろう。

泰子の存在は、彼の都会での孤独な生活を支えるものだった。

第三章 魂の労働

第一節 中也と「死」

「詩的履歴書」によると、中也の最初の詩作は八歳の時である。その詩は現存しないが、三歳下の弟亜郎の死を歌つたものという。八歳の少年が書いた詩とはいつたどのようなものであつたのか。技巧などはもちろんなかつただろう。私はこの詩作は、弟の死を悲しむ心が自然に言葉に表れたもの、言い換えれば、悲しさのあまり歌われた自然なものだと考える。そしてこのことは、彼の詩作の全てに通じているものだと思うのである。

ところで、彼は生涯の中で祖父母を除いても四人の肉親と死別する。弟の亜郎・恰三と父親、そして息子文也である。

彼は「死兒」や「亡霊」といつた言葉で死のイメージを度々詩の中によんでゐる。また「骨」といつた詩では、

ホラホラ、これが僕の骨だ、

生きてゐた時の苦勞にみちた
あのけがららしい肉を破つて、
しらじらと雨に洗はれ
ヌツクと出た、骨の尖。

と、自分の死をもうたつてゐる。

人は誰でも死から遠ざかつていたいと願ひ、自分の身近に死があるとは考えない。だが中也は死というものを身近に感じていた人だつたのではないだろうか。自分が夭折するとは思つていなかったにしろ――。

中也のことを「不幸の詩人」と書いてあるのをよく見かける（私はそうは呼びたくないのだが）。彼の生涯のうちの最大の不幸は、愛児文也の死であらう。

文也は昭和九年十月十八日誕生、昭和十一年十一月十日二歳になつて間もなく病没。中也は文也を溺愛した。その愛情は「坊や」「吾子よ吾子」などの詩作にも見られる。そして、文也に詩業を継がせようと考えていた。

『遺言的記事』――文也も詩が好きになればいいが、二代がよりなら可なりなことが出来よう。（略）今から五十年あとだつて、俺の蔵書だけを十分読めば詩道修業には十分間に合ふ。迷はぬこと。

（略）迷ひは、俺がサンザヤつたんだ。（後略）

これは昭和十一年七月二十四日の日記である。この時まだ二歳にもならぬ子供に、彼は大きな期待をかけていた。それだけに文也の死に受けた彼の衝撃は大きかつたのだ。

八歳時の弟との死別は最初の詩を書くきっかけとなつた。そして

文也との死別は、『山羊の歌』に続く第二の詩集を出すきつかけとなる。その詩集は「亡き兒文也の靈に捧ぐ」るもので、『在りし日の歌』と題された。この詩集には、「月夜の濱邊」「また来ん春……」などがあり、愛児を失った彼の悲しみが伝わってくる。

「在りし日」とは、「亡き兒文也」のそれであろう。しかし、この詩集編集後間もなくの彼自身の死によって、中原中也の「在りし日」ともなるのだった。

第二節 中也と「詩」

中也詩に感じる寂しさは、交友関係の中での孤独や故郷に対する思いからの孤独であり、また身近に愛した者を失った悲しみであった。前節で八歳時の詩作を「悲しさのあまり自然に歌われたもの」と書いた。これは全詩作に通じているもので、彼は孤独・悲哀・愛情・悔恨などを心のままに表現した。自分の心情を正直に暗示できるのが詩であったと思われる。

詩は 魂と心の暗示です。

(昭和二年十月三十一日 日記)

私は生活(対人)の中では、常に考へてゐるのだ。考へごとがその時は本位であるから、私は罪なき罪を犯す。(それが罪であるわけは普通誰でも生活の中では行為してゐるからだ。)(考へごととは道徳圏外だから)

そして私の行為は、唯に詩作だけなのだ。多いか少いか詩人(魂の労働者)はさうなのだが、私のはそれが文字通りで、滑稽に見える程だ。(昭和二年十一月十三日 日記)

——余談をはさむが、第二章第二節で問題にした「奇行」は彼に言わせると「罪なき罪」であるらしい。最後にもう一つ詩から引用する。

何を読んでみても、何を聞いてみても、

もはや世の中の見定めはつかぬ。

私は詩を読み、詩を書くだけのことだ。

だつてそれだけだ

私にとつては「充実」なのだから。

(未刊詩「現代と詩人」)

引用したこれらの文から、彼がいかに詩を大切にしていたが感じ取られると思う。

現時点たどり着いた私の見解をまとめてみると——。

中也の詩の根底には「故郷への思い」と「孤独感」があり、それらの心の叫びが「詩」という形で表れ、またそれは、自然のまま(心のまま)に歌われた詩なのである。

よつて、彼の詩作(魂の労働)は自然の行為であり、彼にとつて詩とは、自己の精神を表現する場、「魂と心の暗示」の場であった。

第四章 在りし日——孤独の詩人

彼の日記にこういふ記述がある。

孤独以外に、好い芸術を生む境遇はありはしない。

単なる強がりと言つてしまえばそれまでだが、彼の「孤独」は必ずしも「不幸」なものではなかつた。

僕の血はもう、孤独をばかり望んでゐた。

それなのに僕は、屢々人と対坐してゐた。

僕の血は為す所を知らなかつた。

気のよさが、独りで勝手に話をしてゐた。

後では何時でも後悔された。

それなのに孤独に浸ることは、亦怖いのであつた。

それなのに孤独を棄てることは、亦出来ないのであつた。

かくて生きることは、それを考へてみる限りに於て苦痛であつた。

〔未刊詩「我がデレンマ」〕

孤独は、生活者としての中也には「怖い」ものであるが、詩人としての中也には「好い芸術を生む」ための必要な「境遇」であつたのだ。

中也を亡くし、『在りし日の歌』を編集し終えた中也は故郷へ戻る決心をする。そこで新たな詩生活に入ろうとするのだ。

同詩集「後記」の末尾を引用する。

私は今、(中略)東京十三年間の生活に別れて、郷里に引籠るのである。別に新しい計画があるのでないが、いよいよ詩生活に沈潜しようと思つてゐる。

抑、此の後どうなることか……それを思へば茫洋とする。

さらば東京！ おゝわが青春！

「茫洋」たる彼の前途は死であつた。

こういう中也を人は「不幸の詩人」と呼ぶかもしれない。だが、果たせなかつた帰郷(或は死という形で果たした帰郷)は、彼の最後の孤独であつただろう。

中也は生涯「孤独の詩人」であつた。

おわりに

詩人中原中也の生涯を見ながら「彼にとって詩とは？」を探つてきたのだが、全てを書き終えた今、中也自身の、「私の個性が詩に最も適する」という記述があつたことに気付いた。彼と詩について私がどう解釈してみても、全てはこの言葉でおさまってしまうようだ。中也の表面的な事しか知らないのに、私的な見解を断定的に書いてしまったのは故人に申し訳ないという気持ちである。

稚拙な論述で、内容も表面的な事ばかりの論文であり、反省する点が多くある。しかし、自分で理解した範囲に於てこの詩人について考えてみたことに充実感はある。

中原中也は、彼に関する本を読めば読む程より興味が深まっていく、そんな詩人だつた。決して器用とは言えないだろう彼の人生は共感する事も多かつた。

よく「人生は出会いである」と言われるが、中也の人生は正しくそれだつた。人にしろ、書物にしろ、「出会い」は素敵なものだと思ふ。私と中也詩との出会いが卒業論文へとつながつたように、どんな小さな出会いでも大切にしていきたいと思つている。

これからも中也詩を愛読していきたい。

参考文献

三、上乘の詩人論として、推称したい。

(清水)

『中原中也全集』1～5巻 角川書店

『中原中也の詩と生涯』村上護 講談社 昭54

『朝の歌』大岡昇平 角川書店 昭33

『兄中原中也と祖先たち』中原思郎 審美社 昭45

『わが中原中也』河上徹太郎 昭和出版 昭49

『文芸読本中原中也』河出書房新社 昭51

『文学界』十二月号 文芸春秋社 昭12

『評伝中原中也』吉田熙生 東京書籍 昭53

『私の上に降る雪は—わが子中原中也を語る—』中原フク述
村上護編

講談社 昭48

『ゆきてかへらぬ—中原中也との愛—』長谷川泰子述・村上護編

講談社 昭49

『中原中也必携』吉田熙生編 学燈社 昭56

『中原中也アルバム』中原思郎・吉田熙生編 角川書店 昭47

『兄小林秀雄』高見澤潤子 新潮社 昭60

〔評〕

一、中・高・大と繰り返される「中也詩体験」が引金となって、中也研究になった必然性は自然であり、もっとも望ましい論文執筆のモチーフである。

二、「中也と孤独」——これは、中也研究の最大の、そして本質的なテーマといってよい。それと取り組んだだけでも、短大時代のかけがえない収穫であったといってよい。